

下で紹介した『大津絵』より。②「狐女」とも呼ばれる「三味線弾きの女」。音楽や美女に感嘆される者への戒めか。③傲慢な雰囲気を持つ、身分の低い武家奉公人の「槍持奴」。虚勢を張る男を皮肉る。ともに庶民のウィットが利いている。



井波 律子 評

大津絵——民衆的諷刺の世界

クリストフ・マルケ著

(角川ソフィア文庫・1512円)

大津絵は江戸時代初期から明治にかけて、東海道最大の宿場のひとつ、大津の町はずれで、旅人に土産物として売られていた民衆絵画。その独特の自由自在にして飄逸な趣は今も、見る人に忘れがたい印象を与える。

本書は、日本の近世・近代美術史を専門とするフランスの学者、クリストフ・マルケが、その歴史から説き起こし、近代の画家に与えた衝撃に至るまで、多種多様な鮮明な図版(模写を含む)を紹介しながら、大津絵の全貌を解き明かしたものだ。本書は三章によって構成され、第一章で、まず大津絵の歴史がたどられる。初期の大津絵

もどづくこの発想には、機智の閃きもあり、感嘆させられる。

初期の神仏画につづき、十八世紀になると、大津絵の真骨頂ともいうべき、世俗的な画題が

は十七世紀末まで、神仏を画題とする作品がほとんどだった。阿弥陀如来、青面金剛、法然、空海等々が描かれるが、ことに興味深いのは「十三仏」と称される作品である。もともと初七

主流を占めるようになる。世俗画大津絵には鬼がしばしば描かれるが、けっして恐ろしい怪物としてではなく、鼠に追いかけられて逃げ惑ったり、泣きそうな表情で念仏を唱えたり、なんとも気弱で滑稽な存在として出現する。ここに、いきいき

サラリと描いたものなど、のびやかで辛辣なユーモア感覚と諷刺精神にあふれた作品も多い。大津絵は世俗画隆盛の時期を過ぎると、しだいにすべてを笑い飛ばす遊戯感覚や鋭い諷刺性を失い、護符つまりはお守りとしての用途を担うようになり、病氣、盗賊、火難等々、種々の災難から家や身を守る縁起物となつてゆく。かくて、東海道を行き来する旅人がいなくなるとともに、熟練の職人絵師の手に

シンプルにして自由闊達な表現力

日から三十三回忌まで、十三回の法要でそのつど異なる仏を描いた仏画が掲げられるのが常だった。それを簡略化し、十三の

した悪戯っ気に富む大津絵のパロディの精神や逆転の発想を、見てとることが出来る。また、こうした世俗画には、大名行列の先頭を行く威張った槍持奴の姿を、虎の威を借る狐とばかり、憎々しげに描いたものや、

なる大津絵も忘れられていったのだった。この大津絵の変遷を、著者は簡にして要を得た筆致でみごとに描ききっている。

最後の第三章では、楠瀬日年と大津絵の関わりが記されるとともに、浅井忠、岸田劉生、梅原龍三郎、ピカソ、ミロなど、洋の東西の近代画家が、大津絵のシンプルにして自由闊達な表現力に衝撃をうけ、忘れられた大津絵の魅力を見出したことが述べられる。

仏をすべて一枚に描き込み、どの法要でも兼用したのが、この「十三仏」という。こうした「十三仏」は多く残っている由。いかに庶民的な知恵と実用性に

り、憎々しげに描いたものや、三味線を弾く美女の着物の裾から、狐の尻尾が出ているさまを

第二章には、早くから大津絵に注目し、その散逸と消滅を懸念した、篆刻家の楠瀬日年(一八八〇—一九六二)が、ほとんどすべての大津絵の画題を模写

本書は、フランス語で書かれた原本を著者自身が日本語訳したのだが、平明で読みやすく、美しい図版とともに、大津絵の世界への絶好の水先案内となっている。